Japanese Association for Religious Studies

き、シンプル、といったイメージであった。禅が二十四時間の生活全体であり、儀式的側面も強く持つものであるという「予期せぬ発見」や、食事、誦経、立ち居振る舞い等、全てが速く、ついていけず、「軍事教練的」で修行道場は「二十才から三十才くらいまでの若い人が過ごす一時的訓練の場所」という印象がもたれた。これは、①修行道場での生活が基本的には外部に知られていない。②文字化されていないので情報量としては少ない。③その時点におけるヨーロッパの禅と日本の禅が異なるといったこと等から生じたものと推測される。彼らが持った問題意識は肉体的苦痛もさることながら、僧堂のあり方が修道院とは異なり、自分たちの修道制度と比べていいものなのかどうか、雲水からいかにして完成された禅僧、老師に成長しうるのか、雲水は読んでいるお経の内容も理解していないし、滞在する期間が短いといったことなどについての疑問である。儀礼並びに礼拝についても、複雑で細かく規定されているし、誰に向かって礼拝がなされているのか？等々の意見が寄せられている。

総括として彼らは「ヨーロッパ側の人間は禅を知りたいと望んだ」結果、日本の禅の「常態」をそのまま、丸ごと体験することができたという。交流を進める欧州側の根底にある要因は、①カトリック修道制のなかで変えなくてはならないところがあるという自覚。②カトリック修道制のなかで生きる者として、根源的志向性において近いという禅に対する共感。③第二バチカン公会議以前と以後の修道生活の変化を統合したいという「教義と実践の一致」を願う希求である。この交流の基本的性格と西洋側の特徴を要約すると、自分よりずっと若い人たちにまじって、肉体的苦痛、不慣れな環境に限界まで耐えることが、修道士としての長いキャリアを保っていた人たちによって体験されたことから、信仰心、求道性に裏打ちされて初めて成り立つ交流であるということが挙げられる。こうしたことの根底には伝統を守りながら、変えるべきところを変えていかなければいけないという自覚と、禅、並びに教義と実践の一致への希求があると言えよう。欧州側は、短期間、一時的、結婚する、雲水がお経を理解していない等の修行道場における「制度的限界」を認識しながらも、なお交流の継続を念願している。このことは、修行道場においてこそ真正に「禅」を学ぶことができると彼らが理解していることに基づくものと推測される。

日本における宗教間対話の現状

武藤亮飛

宗教間対話の定義は様々であるが、各宗教組織の代表者が出席するものが宗教間対話だとみなされる傾向にある。実際、宗教間対話を推進する人々の中には、宗教間対話とは宗教組織の代表者が出席するものであり、参加者は組織の代表であるという自覚を持たなければならないと主張する人もいる。

たとえば東西霊性交流に出席するのは雲水や修道士である。彼らは各宗教組織の「代表者」として他の参加者からみなされることになる。しかし第十一回東西霊性交流において、少なく

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

とも雲水は自身が「禅宗」や宗派を「代表している」という自覚は低かった。雲水らは修道士に「なりきろう」とし、禅宗とカトリック（とくに修道生活）に共通点を見出そうとした。他方で修道士たちは、雲水らに「禅僧として」振る舞うことを要請し、雲水らの言う禅宗とカトリックの共通点については慎重な態度を見せている。

このように、参加者の意図とは関係なく、宗教間対話の参加者は何らかの代表性を付与されることとなる。しかし、日本で行われている比較的小規模な宗教間対話に参加する動機の多くが個人的なものである。つまり、組織の代表としてではなく、自身の求道や他者理解を動機として対話に参加する人々が多い。

この参加者の意識を巡る問題は、二〇一一年七月九日に行われた日本宗教ネットワーク懇談会による「シリーズ「いまなぜ宗教間対話なのか」」の第一回シンポジウムにおいても議論がなされた。このシンポジウムにおいて、宗教間対話は社会的問題の解決に寄与すべきであり、組織間の宗教間対話が望ましいという意見がでる一方で、組織の代表者は教団の利害関係に縛られており、「深い」対話をするためには個人間での宗教間対話が望ましいという意見がみられた。このように、宗教間対話の現場において、「代表性」が対話を阻害する、あるいは「個人性」が社会的影響力を弱める、という見解の対立が見てとれる。

日本における比較的小規模な宗教間対話の参加者の多くは組織の代表というよりも「一個人」である。したがって、その宗教間対話で得られているものの多くが個人的学びである。だが、ほとんどの場合、参加者は個人的な意図とは関わりなく、他の参加者から宗教組織の代表ともみなされる。他方でまた、宗教間対話の担い手が組織とされている場合でも、実質は個人であることが多い。求心的な人物がおり、その人の下に皆が集まってくるのである。

多くの宗教間対話が世界平和や宗教協力などの何らかの社会的実践を目指して、対話を重ねている。しかしその参加動機の多くは、個人的、自発的なものである。他者から学ぶこと、他者を知ることは刺激的で面白いことであり、宗教間対話の参加動機となるが、逆に、宗教が社会に対して何らかの実践や社会貢献を行う場合、宗教間で協力する必然性はほとんどない。それに加えて実際宗教間で、共同で何らかの実践を継続的に行うことは非常に困難であり、なかなか実現しない。それでも対話が継続して行われている背景には、このような個人的な動機、他者とかかわる楽しみが存在しているからではないだろうか。

日本における比較的小規模な宗教間対話の多くは社会的な（実践的）目的を掲げているが、その多くは自発的な個人の集まりであり、個人的学びの場となっている。だからといってこの個人性（あるいは目的と動機の乖離）を批判するのは正当ではない。なぜなら代表性が高い人物が出席するからといって社会的影響力が強いとも限らず、むしろ、対話は求道的（求心的）な個人によって担われ、その個人のほうが社会的影響力を持つ可能性があるからである。

NII-Electronic Library Service